第十一回九州戯曲賞最終審査員選評

中島かずき

『よりよりな日』は導入から一気に読ませた。

主人公の彼氏のＤＶから主人公を守る隣人の登場は胸をすくし、不法滞在者である隣人のセマイの造型もいい。ただ、「さて、セットアップは終わった。ここからどう展開する」と期待した所でいきなり終わってしまい、肩すかしをくらってしまった。起承転結の起承で終わってしまった感がある。実にもったいない。審査会でもその意見は多く、もう一度書き直してその先が読みたいという意見も出ていた。僕も同感だ。書ける人だと思うので、この先を期待したい。

『かみがたりぬ』は、まずこのタイトルがいい。古事記編纂時の宮中の権力争いをエンターテイメント仕立てで描く。「なるほど、各部族がそれぞれの権利を主張して自分達の神も古事記に入れろと主張してくる。しかたないから稗田阿礼が適当な神様をでっち上げて古事記に無理矢理入れ込まざるをえなくなる」みたいな話なのかと勝手に想像して読み始めたら、かなり違った。これはもうこちらが勝手に想像しただけなので作者に罪はないのだが。ヒエダノアレが部族抗争に敗れた者たちの集団というのは面白い。だが、彼らの語る物語が現在伝わる『古事記』に即しているのはもったいないと思った。敗者が語るからこその視点、神話の読み替えがあってもよかったのではないか。こういう題材を扱うのならそうあって欲しい。それはただの個人的な願望かもしれない。こういう真っ向から物語を書こうとする姿勢は共感する。しかし、こういうエンタテインメント寄りの作品は戯曲賞の選考会では苦戦するものだ。だからこそもっと作品の強度を増して、審査員を力ずくで唸らせる「面白さ」を追求するしかない。いろんな物を見て読んで感じて、自分の中で何を面白いと感じたか、何に心が動いたか、何に肌が粟立ったか、それを自覚し考えて、自分の「切実」に落とし込んで欲しい。自分が信じている「物語」でなければ、他人の心を動かすことはできない。これは自分にも言い聞かせていることだ。

僕自身がストーリー重視の作風であるため、ストーリー、プロットがしっかりしているものは理解出来るが、その芯が弱い作品はどう読んでいいものか困惑するときがある。

今回でいえば『Aliens』と『island』がそうだった。

『Aliens』はそらと櫻芳、２人の女子高生それぞれが抱えている問題を、出会い接触する中でブレイクスルーしていく。それはわかる。ただ、その展開が叙情的で、例えば小説が書けなくなったそらがなぜ再び書けるようになったのか、弁論大会に出た櫻芳が途中で喋れなくなるがそこにそらが来たことで再び喋れるようになる。ただ、僕はつい、そこになにかもっと劇的な

展開を求めてしまう。

『island』もそうだ。何人もの登場人物が交錯するようで交錯せず、何かが起きるようで何も起きず、それぞれの会話はうまいので読めてしまうのだが、ではこの作品から何を受け取ればいいのか、自分にはピンと来ず、当惑してしまった。

最終選考にまで残っているのだから、優れた部分はあるのだろう。それを読み取れないのは自分の問題なのだろう。選考会で他の審査員の方の意見を聞くし、そこで自分にはない意見が出ればそれを参考にすればいい。そういう姿勢で審査会に臨んだ。審査会では傾聴すべき意見も出た。しかし、やはり自分が積極的にこの二作を推したいというところまではいかなかった。

僕は大賞候補に『かぼす咲く』を推した。

作者の日下さんは、過去三回最終選考に残っている実力派だ。

ご自身が「自分の作品には悪い人が出てこないという指摘を受けてもいる」と語っているように、その作風は穏やかで情深く、田舎の人々の関係性を丁寧に描くものだ。

今回の『かぼす咲く』は、その作風を貫き通すという意味で、丁寧に描かれているし素直に心打たれた。出来すぎといえば出来すぎな展開、ある意味ファンタジーなのだが、そのファンタジーを書き続けることにも意味があるのではないか。地元で演劇を続けていくことのしんどさ、家庭との両立などいろいろと大変なことはあるだろうし、その澱も身にたまっているだろうが、あえて、この「優しい」作風を貫く意志を応援したいと思った。

審査会でも今回の大賞は概ね一致で『かぼす咲く』に決まった。

２０年以上、大分という地域に根付いて作品を作り続けてきたその粘りが受賞につながったのだと思う。

日下渚さん、おめでとうございます。

横内謙介

『かぼす咲く』を強く推した。戯曲の形式として目新しいものはない。テーマとしても珍しいものではない。昭和の時代に書かれた人情話と言っても通じるような極めてオーソドックスな作品である。しかしリアルでありつつ趣き深い主人公たちの造形、巧みな構成、方言を生かした簡潔にして血の通ったセリフ。さまざまな出来事がひとつに繋がって、主人公と居場所を失くした同級生との心の再会が果たされる時、おそらく多くの観客の心にその劇構造が感動を伴って迫り、ちっぽけだが愛おしい小宇宙が誕生するだろう。演劇というより芝居と呼ぶのが相応しい、懐かしさのある完成品である。
とかく賞というものは、斬新さにアドバンテージが生じるものだ。しかし本作は、その不利を超えてその巧みさ、演じる人観る人たちに対する親切さ誠実さにおいて抜きん出ていたと思う。この作者は今すぐにも職業作家として通用するはずだ。今後の活躍を期待したい。

『よりよりな日』

　序盤から中盤にかけて圧倒的に面白かった。面白い以上に衝撃的で、これは大変な傑作に出会ってしまうと思わず身構えた。平和の国日本における、恋人たちの間にある得体のしれない暴力と、内戦状態にある国から逃げて来た女の体感したリアルすぎる暴力。このふたつの暴力のイメージが小さなアパートの一室で、極めて演劇的な鮮やかさで出会う。難民問題という今日的な大テーマもそこに絡んでおり、その発想と運びは天才的だと思った。しかし入管の役人とのやりとりが始まる辺りから人物たちの動きのダイナミズムが失われ、展開が早足で予定調和になってしまった。途中までがとても素晴らしいので、これで終わらすのはいかにも惜しい、歴史的大傑作の種子だと思う。

『island』

この作者には圧倒的な筆力を感じた。数多くの登場人物たちに対して、それぞれの背景を用意し、それぞれに命を与える。それらすべてを大事な物としてフラットに並べてゆく。一方、全体としては特別なことは起こらず、物語はどこにも行かない。そのフラット感がこの作品の肝なのだろう。しかしこれは個人的な趣味も含んでの感想だが、どこまでも横に広がってゆくようなフラット感に、私は退屈を感じてしまった。たくさん並べられたエピソードの中に、唐突に縦に伸び上がる運命的な出会いや、ディープに彫り下げられる衝突などが少しでもあれば、また違った印象があったかもしれない。多様性を描くはずなのに、刺激が好きな私には、その多様があまり感じられなかった。

『Aliens』

閉塞感を感じつつ生きている、ふたりの高校生が、ふとしたことで出会い、いつしか魂を通わせ合って、やがて希望を見出す。その出会い方、魂が相寄ってゆく展開が丁寧に描かれていて、好感を持った。劇中に綴られてゆく少女の書く小説、宇宙船にひとり取り残された女とＡＩの物語も面白く、リアルなふたりに暗喩的に上手く絡まり、作者の可能性を感じた。ただ、終盤に向けての収束の仕方が、そこまでの繊細さに比して、粗雑になってしまったと感じた。特に弁論大会での主張が、状況の打破に繋がるというところが私には残念だった。ふたりの旅立ちは、弁論という少し古い押し付け的なスタイルで解決されるのではなく、儚くも愛おしい関係性の中から導き出されて欲しいと思った。

『かみがたりぬ』

上演台本として面白かった。時代設定も、有名な登場人物たちも、考証などは無縁、無用な物として、ひたすら目の前にある自分たちのステージ上で、確かに動き、輝く素材として取り扱う。その試みは成し遂げられていると思う、実際の舞台が本の中から、明確に浮かび上がって来た。しかし戯曲という、もう一歩踏み込んだ冷静に向き合いたい読み物としては、ツッコミどころが多すぎて、その上にもっと追及して欲しい部分があった。特に主人公ヤスマロとヒロインたるアレとの出会いから、誤解や反発を経てやがて絆が結ばれてゆく過程を物語の柱として描き切ること。そして芝居の主人公たる二人がともに迎えるべきカタルシスへの展開。勝者ではなく、敗者たちが踊りとして語り継いだ物語が「古事記」になったのだ、という大胆な仮説についての書き込みも全く足りていないと感じた。
これはたとえエンタテイメント作品だとしても、舞台作品として観客を異世界に巻き込み、ついには感動させるために必要な「書ききる力」だと思う。力技で構わないから、この作者が今後、もっと物語との格闘を見せてくれることを期待したい。

岩崎正裕

今回の九州戯曲賞にも五本の力ある作品が最終候補にノミネートされた。実験的な企みで書かれた作品が多いと、読み解きにかなり苦労することもあるが、今回の候補作はどれも舞台上演のための手がかりがしっかりしていて、想像を巡らせながら読むのは楽しい体験だった。

到生さんの「かみがたりぬ」は古事記をエンターテイメントに仕立てた作品。場面構成とその流れは的確で無駄がない。とは云え神話の世界をそのままに現代で上演する意図はどこにあるだろうか。むしろ現代を古事記によって描くようなコンセプトが用意してあれば目を見張ったかも知れない。手塚治虫が「火の鳥」によって物語ろうとした壮大な宇宙観の仕掛けとでも言えばよいか。きっとこの作品は読むより観た方が面白いのだろう。今回の作品が置かれた場所が戯曲賞であったという事実と、今後作者がどう向き合うか。到生さんの舞台に傾ける情熱は行間から溢れ出ている。それはとても好ましい。

伊藤海さんの「island」は上下二段に組まれた大長編戯曲。この二段組みに初読では若干戸惑った。平田オリザさんの提唱された現代口語演劇の枠組みとは少し違う。あちらの世界とこちらの世界がオーバーラップする映像的なスタイルと言えば伝わるだろうか。その手法に独特のリリシズムを感じ、最終的には馴染んで風景を想像することが出来た。点在する場所と時間は、確実には像を結ばず拡散していく。作者の語りすぎない決意のようなものに触れ、自己の既存の価値観が揺さぶられた。そういった意味で候補作の中では最も現代を捉えようとした意欲作ではないかと感じた。(世界のどこも見ていない)という秀逸なト書きが何度か挿入される。「island」というタイトルは現代日本を象徴するのだろう。

田村さえさん「Alians」。描かれる世界への眼差しが美しかった。中国に由来を持つ少女と、女子高生との出会いからドラマは始まる。登場人物を二人に絞ったことも成功の要因。途中、宇宙飛行士とAIの場面が挿入されるがこれも冒頭の現実の二人と二重写しとなり劇の効果を高めている。他に、演劇であることに自己言及するメタシアター的構造も見られるが嫌みがなく必然を感じる。審査会のあと作者自身に聞いたのだが、これらの題材は実際に上演した高校生と擦り合わせを行いながら生まれたものだそうだ。作り物の感じがしないのはそのためなのだと合点がいった。荒廃していく世界に無垢な力で如何に立ち向かうか。最後の台詞でそれを言い切って劇は終わる。それが清々しいと思われるほど、現実の世界は暗い亀裂へと向かっているのだろう。

升孝一郎さんの「よりよりな日」は書き出しから引き込まれた。全ての候補作中、冒頭から登場する日野という人物が最大の悪人。偽善を振りかざして相手を支配していく。その対話の運びが巧みで作者の術中にはまった。ところが中盤、入国管理局の役人が登場するとドラマは途

端に停滞し始める。権力側と難民の女との葛藤が軸になるのだが、せっかく面白かった日野の発言がドラマの要請で封じられることになるのだ。役人を登場させずに、日野に権力側の代弁をさせる方法もあったのではないか。日野なら世間の常識というものを振りかざして登場人物たちを追い込んでいくことも出来たはずだ。最高のピカレスクとも成り得た一作だったと悔やまれる。

そして日下渚さんの「かぼす咲く」。以上五本の候補作の中でこの作品が大賞となった。何度か九州戯曲賞の審査員を務めさせていただいて「九州らしい戯曲」というものがあると思うようになった。それは人に根差す善意を信じようとする作品。日下さんの作品には前回の候補作も今回もそれが貫かれている。どちらも離別した者が再び寄り添う物語だ。きっと日下さんがこれからも書いていくドラマの根幹なのだろう。前回審査会では私の語彙力のせいで結果を覆せなかったが、今回は多くの審査員がこの作品に共感を寄せたことが何よりうれしかった。もちろん劇の辻褄の意味では欠点はいくつかある。けれどもそれをあげつらうよりも、今この時代に作者が「かぼす咲く」を書いたことを喜びたいのだ。現実は簡単には変えられないが、劇作家の創造力がやがて世界を動かしていくと信じたい。

桑原裕子

候補作はいずれもスタイルや特性が大きく異なり、似た雰囲気の作品がなかったこともあって、愉しく読みました。それぞれ惹かれる部分があったものの、頭抜けて推したい作品かと自問すると弱く、引っかかる点も同じくらいのバランスであったため、今回は大賞作品を一作に選べないまま選考に臨みました。

『かみがたりぬ』は、ほかの審査員も仰っていましたが、上演された舞台が熱量の高いエンタテインメント作品として面白かっただろうと想像できました。「古事記」編纂をめぐる人びとの宿命の物語を、音楽劇仕立てで見せたり、神話の劇中劇で見せたりと勢いを持って描いていて、観客を一瞬も飽きさせないという気概を感じます。ただ、怒濤のシーン展開において、構図としての人間関係は理解できても、主人公ヤスマロはじめ、多くの登場人物の心情を拾いきれないまま読み終えてしまいました。
ヤスマロはなぜ舞いを「言葉」にすることが出来るのか。武人として生きてきたヤスマロの誇り、その引き換えに背負った孤独とは何か。なぜ、学びを得たいと思ったのか。深められる要素がたくさん転がっているだけに惜しいです。人間の個性は「親を亡くし、戦火を生きぬいた」と言う設定だけでは定められないものです。粗野な振る舞いや、時に残酷ともいえる言動がどんな背景からくるものなのか、もっと人物を書き込めば、強い求心力を持つキャラクターに育つと思いますし、ドラマの層がもっと厚くなったと思います。

『よりよりな日』
何より、台詞が上手いと感じました。冒頭、澄川の恋人・日野の「散歩は行ったの？行くって言ったよね？」という台詞だけで、澄川が引きこもりであること、日野がそんな恋人を支配下に置くモラルハラスメントの常習であることがわかります。しばらくページを繰れば、日野が平手打ちをするので「ああ、やはりね」と思うわけですが、恐る恐る澄川が出した残り物を「いいよ、それ好きだから」と素直に喜んで食べる日野の悪びれなさ、セロトニンを「ドーパミン？」と聞く理解のなさ、常に自身を庇護者の側に置く言動など、物理的な暴力以上に心理的な追い込みが非常によく書けていました。澄川が硬直していく様が手に取るようにわかり、隣人のセマイが彼女を救った瞬間には救済のファンファーレが鳴る様な心持ちで、思わず涙が出ました。
中盤以降、石壁というキャラクターが登場することから突如展開が加速します。そのハラハラとした時間も確かに面白いし、重要な社会問題を突いている内容ではあるのですが、それまで丁寧に心理描写を描いていたのに対し、性急にことが進んでしまった印象がありました。
石壁という人物が魅力的なこともあり、セマイに対して「この国以外の場所へ助けを求めるのはどうか」という提案には、悲しくも賛同してしまう説得力があります。しかし澄川はこの国は残り、ともに戦おうと言う。散歩にも出ることが出来なかった澄川をそこまで突き動かした

ものはなにか。
生きることがしんどい澄川の元に、必死で生きる場所を探しているセマイが突如現れた、という設えこそが、この戯曲の素晴らしくドラマティックで面白い核なので、二人の関係が深まる時間をもっと見たいと思いました。
私はこの作品に最も惹かれましたが、ここから先を掘り下げた物語が見たいという審査員の声に強く賛同したので、大賞に推すことはしませんでした。

『Aliens』
もしも自分が演出するならどんな風に作るかな、と想像しながら読んだとき、この戯曲はたくさん演出的工夫が必要だと感じながら読みました。難しい、不親切、幼いとも感じます。けれどもそれを戯曲として未熟としてしまうのは違う気がしました。この戯曲の散文的なスタイルや、訥々とした会話のなかにある、いいようのない心細さ、苛立ちと不安、何にも定義されたくない、わかられたくないのにわかって欲しい矛盾。そうした思いは充分に伝わってきたからです。ただし、それらが中国語や手話・ト書き・詩的なサブタイトルも含めて成立しているような気がするからで、いっそ演出も俳優も排し、まるっと戯曲を読んでもらった方が伝わるんじゃないかと思いながら読んでいました。
しかし最後まで読み、この戯曲はやはり演劇というスタイルで、その場にいる観客という「他者」と共有してこそ意味があると感じました。最後に二人が観客を見据えていう言葉はいかにも高校演劇的で、やや説明過多かも知れません。が、その表現さえも今の彼女たちの現在地としてリアルに映リ、等身大のメッセージに胸を打たれました。
惜しむらくは、長らく心の友であったくまのぬいぐるみを手放した直後に現れた中国人同級生とのやりとりが、くまさんの代替品のように映ってしまう瞬間があったことです。イマジナリーフレンドではなく、自分が思うとおりの言葉をくれない生身の人間だからこそ、互いの心が通った刹那の煌めきがあり、最後の「二人で、生きて帰る」という台詞に繋がったら……私は速攻でiPhoneからキリンジの「エイリアンズ」を流し、号泣していたかもしれません。

『island』の作家はフェアな方なのだな、というのが読後の印象でした。決して少なくはない登場人物を全員きっちり等分に描くという試みは、私自身も劇団活動含めて何度か体験したことですが、おそらくこの戯曲もそうした制約を自らに課して描いたのだろうと感じていました。しかしそれを制約として苦しんでおらず、世界ごとに表現スタイルも変化させたり、楽しんで描いていることが伝わって好感を持ちました。
群像劇というよりは、日本各所に点在するキャラクターの居場所に定点カメラを置き、短いシーンをスイッチングして見せるやり方で、審査員の方々からは読み方がわからないという声もありましたが、マルチストーリーのアドベンチャーゲームなどが好きな私は、悩まずに読めました。
ただ、関係性が深まる瞬間や、話題が核心に近づく直前に、毎回パツッとシーンが切り替わってしまうもどかしさが、途中から少々ストレスになってきたのです。深いところへ進むまでに

一定時間の雑談を経過しなければならないので、見る側の持久力を求められます。
登場人物はそれぞれに魅力的で、背景や関係性も緻密に描かれており、この人たちがどこへ行くのか、またはどこへも行かないのか？と、観客を牽引する筆力があります。あくまでもクールに俯瞰で進め、作者の意図を匂わせないところも好きです。ですが、するするとはぐらかされてしまうことが続くと、それはそれで恣意的に映りもし、「追いかけても、どうせ私の頭じゃわからんだろう」と、見ている方がさじを投げてしまうのです。
作者の描きたい物語の根幹、底にある熱に、もう少し強い手触りで触れさせて欲しいという思いでした。

『かぼす咲く』
読み終えて、ほうっと温かいため息が出るような作品でした。
風采の上がらない無職男・心平が、偶然再会した初恋の人の子どもを急遽、託される。いつ帰ってくるかもわからない心細さを抱きながら、つつましくもあたたかい共同生活を営むふたりの姿は、日常のなにげない瞬間が「誰か」の存在によって瑞々しく輝くことを見せてくれます。徐々に心を通わせていった二人が、かぼすサイダーの「すっぱ！おぉいし！」から、不意におたがいのさみしさに呼応するように泣き出してしまうシーンが、とても良かったです。酸っぱくてほろ苦い、それでいてさわやか、まさにかぼすのような読後感。実際に何度もかぼすの話題が出てきますが、ストーリー自体の成分表がちゃんと「苦み、酸味、さわやかさ」と言える仕上がりになっているのが凄いです。
とはいえ、心平と廉の出逢いに都合の良い偶然が重なりすぎている点と、肝心の子どもを置いていった母親・翠に関しては、最後まで引っかかりました。
一時でも我が子を手放したという罪深さに翠がどう向き合うのか。私自身、そこが一番知りたかったのかも知れません。そこに正当な理由がなくてもいいんです。とっさの衝動、弱くて愚かな部分だったとしても、「初恋」という砂糖ですべて覆ってしまわず、シビアな「苦み」も込めて描いた方が、より芳醇な人の香りがすると思ったからです。私もグレープフルーツは砂糖をたっぷりまぶす質ですが……。
審査員も総合的に評価が高く、大賞に推す声に私も異論はありませんでした。こうした素朴で丁寧に描かれたあたたかい物語が戯曲賞で正当に評価されることを、嬉しく思います。日下さん、おめでとうございます！

九州戯曲賞に参加するのは三度目になります。
戯曲賞の審査というものは、審査員が各々勝手に読み取った感想をもとに、技術や熱量など様々な要素を推し量り、好き嫌いといった個人的な価値観を含めつつ、いちおうの優劣を決めねばなりません。けれど実際、その選評を読んでみると、思ってもない箇所を褒められたりもする一方、湾曲して解釈されたり、表面的にしか読み取ってもらえなかったり、「そんなつもりじゃないのに」と候補者側として不服に思うこともあります。
九州戯曲賞の良いところは、審査のあとに懇親会があることで「こんなつもりだった」という

候補者側の意図を改めて聞けることです。
あくまで戯曲の審査なのだから読み手の感想がすべてといえばそれまでだし、それにより審査結果が変わることはないのだけど、一方的な審査だけではなく、劇作家同士で意見交換が出来るこの機会は、刺激を受け合い、互いに戯曲の精度を上げていくことが出来る豊かな時間だと感じました。

今回は、審査員の皆さんが公平で機知に富んでおり、和やかに行われたとても愉しい審査会でしたが、女性の審査員が私一人だけだったのは、バランスに欠くと思いました。自分が参加するか否かに関わらず、今後の改善を希望します。

幸田真洋

戯曲を書くということは、否、戯曲に限らずあらゆる表現行為は「世界をどう見つめているのか」という意思表明である―と、いかにも作家っぽいことから始めてみたが、どうにも私には「だ・である調」がなじまない。こそばゆくなってきたので、ですます調にします。一人称も「私」でいこうかと思っていましたが、ぞわぞわするので僕にします。作家だからって作家っぽく振る舞う必要はありませんものね。

でも、若い頃は「作家っぽくあらねばならない」ということに苦しんでいました。

「作家ってこんなものだよね」というイメージがありますが―たとえばパイプをくゆらせていたり、部屋の中に丸めた原稿が転がっていたり、酒好きで頻繁にバーに通っていたり……など―いちいちたとえが古くて恐縮ですが、まあ、一般的な、ベタなイメージってありますよね。

だけど、自分はまるでかすっていない。あまりにも普通だし、早死もしそうもない。（作家って早死するイメージありますよね）

そんな自分を変えようといちいち尖った発言をしてみたり、露悪的に振る舞ってみたり、戯曲だって変にこねくり回したり、意識高い風に社会を語ってみたり、ともかく「作家」になるために色々とチャレンジしてきました。

しかし、結局、なれなかったのです。どうやったって自分は自分ですものね。

そのあまりにも当たり前の事実に気づいた時、大変に絶望しましたが、同時に楽にもなりました。書くものもとるに足らない、普通のことばかりになりましたが、むしろこれこそが自分が描きたかった世界なのだと楽しくなりました。

さて、大変に前置きが長くなりましたが、いかにも作家っぽくなろうと苦闘していた僕なので「そんなどうでもいいことにとらわれず、自分の描きたいものを素直に描けているもの」を評価したいと思っています。

そういう点で言うと、受賞作『かぼす咲く』が一番素直に描きたいことを描けていると感じました。

要領が悪く、失業中の男とかつて憧れていた同級生の女との心の交流を描いた作品ですが、描かれているのはとても小さな世界ですし、人によってはとるに足らないことと感じるかもしれません。演劇的に新しいところもありません。でも、作者の日下さんの「この世界を描きたいんだ」という素直な思いも感じますし「私はこれで勝負する」という強い意思も感じます。その姿勢も含めて推しました。

もちろん姿勢だけではなく、戯曲としての完成度が他の候補作より抜きん出てもいました。セリフも人物造形も物語の展開も上手い。

他の審査員から「出会いに偶然が過ぎないか？」という指摘があり、確かに都合がよすぎす面もあります。しかし、最初に読んだ時には気付かないくらい、さらっと自然に描かれていると思いました。

戯曲というのは所詮、嘘であるわけですし「バレバレの嘘をつくか、嘘とわからないような嘘

をつくか」が技術です。日下さんが長年積み上げてきた技術を感じました。
他の審査員から「ずるい人間もいる。それも含めて人間という視点もあったら」という指摘もありました。確かにその拡がりがあれば、更に深く、厚みのある作品になっていくと思います。
僕自身も戯曲賞をいただいてから、なにか余計な力も抜けて、広く、ニュートラルな目で人間や世界を見ることができるようになりました。同じ九州の作家として、今後の日下さんの活動を楽しみにしています。日下さん、本当におめでとうございます。
駆け足にはなりますが、他の四作品にも触れておきたいと思います。
僕が次に推したのが『island』でした。スケッチの連なりから大きなものを描こうとした試みは好感持てましたが「核心に入ろうとするとはぐらかされる」という指摘がありました。それがあえてなのか？あえてならばなぜなのか？もしくは描けていないだけなのか？僕も含めて掴みあぐねた審査員が多かったように思います。僕は自分自身の人生を決められない人々の中で、最後に作者が（自身の創作活動の拠点をどこに置くかという意味も含めて）ここで生きていくんだという意思を見せたように読み取れて好感を抱いたのですが、描こうとするものを整理して伝えていくという技術が受賞作には及ばなかったのかなと思います。
『Aliens』は「孤独や苦しみに重さがあったとしても、宇宙じゃみんな浮いちゃうんだ」などいいセリフはあったんですが、全体的には言葉やイメージがやや普通であったように感じました。この選評の前置きで「普通でいい」と言っておきながら普通だったと評するのはどうなんだという気もしますが、例に挙げたようにいいセリフを描けるのだから、作者の田村さんの本当に描きたい言葉はもっと他にあるのではないか、ということです。そういう意味では、まだ田村さんが本当に描きたいものを素直に描けていないのではないかと感じました。これからの活動に期待しています。
『よりよりな日』冒頭の空気の作り方はとても上手で、ぐいぐい引き込まれましたが、セマイがバットを手に飛び込んできて以降、少し気持ちが離れてしまいました。面白い展開ですが、ストーリーにキャラクターたちが喋らされているというか、登茂子がセマイの力になりたいというところに至るまでの説得力がやや足りないと思いました。冒頭であれほど支配されている登茂子がセマイにあっさりと心を開きすぎている感じがしましたし、もっと丁寧に、少しずつ展開していけば違った印象になるかとも思います。他の審査員からも「ぜひ、書き直してみてほしい」と期待の声も上がっていましたし、可能性に満ちた作品ではありました。
『かみがたりぬ』僕はこの作品の上演を見ているので、劇場での楽しい雰囲気や観客の反応、興行としての成功は知っています。しかし、戯曲という点のみでみると、古事記をなぞっただけだったという印象でした。古事記を使って何を描くかが作者の腕の見せどころなわけで、そこが僕には読み取れませんでした。何を描くかがぼやけていたのもあって、チョイスされた古事記のエピソードもやや冗長に感じました。「その話は知っているから、それで？」ともどかしい気持ちになってしまいました。